

本校 SSH の開発項目に「教科間連携のさらなる強化」がありますが、教科間連携の仕方にはいくつかの型があります。

① トピック型

複数の教科・科目で、同じトピックや題材を扱う形の教科間連携を「トピック型」と呼ぶことにします。いわゆる一般的な「教科間連携」は、この型に当たるものが多いと考えられます。

たとえば、《新型コロナウイルス感染症》を題材として、「生物基礎」では感染の仕組みや免疫について考察し、「美術Ⅰ」では感染拡大防止を呼びかけるポスターを制作するといった実践が挙げられます。

同一の事象を複数の教科・科目から扱うことで、生徒は異なる視点や立場の存在に気づきやすくなり、事象を多面的・多角的に捉える力（B）の育成が期待されます。

② 概念型

特定のトピックを共有する代わりに、概念を共通項として取り組む形の教科間連携を「概念型」と呼ぶことにします。各教科・科目で扱う題材は異なっても、背後にある概念を意識的に往還させる点に特徴があります。



たとえば、「文学国語」では評論文の読解を通して文学分野における《正当化》を学び、「化学基礎」では実験結果の考察を通して自然科学における《正当化》を学ぶといった実践が考えられます。これらを踏まえ、分野を越えて《正当化すること》とは何かを考察することで、概念理解を深めていきます。

概念型では活動同士のつながりを見いだしにくい側面もありますが、その分、共通する概念を自ら抽出し、比較・整理する思考が促され、洞察力（U）や判断力（J）の育成が見込まれます。

③ 文脈型

ちょうど①と②のグラデーションにあるイメージがこの「文脈型」です。特定のトピックや単一の概念を共有するのではなく、生徒が「意味のある状況」として理解できる文脈（テーマ・問い・社会的課題など）を共有する形の教科間連携です。



たとえば、《防災》という文脈を設定したとき、「数学A」でボロノイ分割を用いた避難マップを作成したり、「体育」で避難所でも実施できる体操を考案したり、「地理総合」で地域の地形や人口分布から災害リスクを考察したりするといった展開が考えられます。

文脈型では、活動同士のつながりを比較的見だしやすく、異なるアプローチや価値観の存在に気づくことで、事象の多面的・多角的な見方（B）に加え、統合する力（I）の育成も期待されます。

これら3つの型は優劣の関係にあるものではなく、授業の目的や生徒の実態に応じて使い分けたり、組み合わせたりすることが重要です。

とはいえ、教科間連携に踏み切るのは簡単ではありません。次号では、その際のアシストとなるような視点を紹介したいと考えています。

